

# 令和6年度埼玉県農業技術研究センター 試験研究成果発表会プログラム

1 開催日時：令和7年2月3日（月） 13:00～16:00

2 開催会場：埼玉県農業大学校（住所：熊谷市樋春 2010）

## 3 日 程

- |                                |             |
|--------------------------------|-------------|
| (1) 受付 [正面玄関ホール]               | 12:00～      |
| (2) 開会式 [大教室、中教室]              | 13:00～13:10 |
| ・開会の辞                          |             |
| ・挨拶                            |             |
| ・事務局から連絡、案内                    |             |
| (3) 講演発表 [分科会1（大教室）、分科会2（中教室）] | 13:10～16:00 |
| 【4課題】                          | 13:10～14:00 |
| <休憩・パネル発表・試食>                  | 14:00～14:40 |
| 【3課題】                          | 14:40～16:00 |
| (4) 展示 [講堂]                    | 12:00～16:00 |
| (5) 閉会                         | 16:00       |

講演発表

分科会 1 (大教室) : 主穀作・畜産・鳥獣害・環境分野

発表時間	課題番号	課題名 (発表者)
13:10~	1-①	<p>今夏の暑さによる水稲への影響と今後の対策</p> <p>玉井試験場(熊谷市)における水稲栽培を例とした作柄調査結果の紹介 水稲栽培時期における高温が水稲の品質・収量にどのような影響をもたらしているのか、今後どのような管理が求められるかについて、本年産の結果を基に報告します。</p> <p>(水田高度利用担当 車田智哉)</p>
13:25~	1-②	<p>ここまでわかったイネカメムシの発生や防除</p> <p>埼玉県におけるイネカメムシの発生動向について</p> <p>県内ではイネカメムシの被害が拡大しています。適確な防除のためには発生消長の把握と効果的な防除体系の構築が欠かせません。今年度に、現地における調査や検証を行った成果を報告します。</p> <p>(病害虫防除対策担当 酒井和彦)</p>
13:40~	1-③	<p>水稲新品種「えみほころ」の栽培の留意点</p> <p>暑さに強い新品種!栽培のポイント</p> <p>現在までの試験結果を基に、水稲新品種「えみほころ」の安定収量・高品質生産を目指した栽培技術を紹介します。</p> <p>(水田高度利用担当 山本彩乃)</p>
13:50~	1-④	<p>遺伝子解析で効率的に水稲早生品種を作る方法</p> <p>遺伝子解析で水稲の早晩性がわかる!?</p> <p>水稲農家では、大規模化が進むにつれ、熟期が異なる品種を導入し作業分散を図る必要があります。本研究では、熟期に関する遺伝子を解析し、熟期が異なる品種を育成するための交配母本を選定したので報告します。</p> <p>(遺伝子情報活用担当 中村善紀)</p>
14:00~		休憩・パネル発表・試食(40分)
14:40~	1-⑤	<p>アライグマはどこにいる?どこで捕まえる?</p> <p>アライグマの行動解析</p> <p>本県の野生鳥獣による農作物被害額が最も大きいアライグマにGPS発信器を装着し、行動域を解析するとともに生息地点の現地調査を行いました。出没頻度が高い環境要因と捕獲に適した場所等について報告します。</p> <p>(鳥獣害防除担当 湯村英明)</p>
14:55~	1-⑥	<p>牛のエサを最適化して温室効果ガスを削減</p> <p>環境にも配慮した畜産経営の実現のために</p> <p>温室効果ガス発生の原因となる排泄物の窒素排泄量削減が課題となっています。そこで、牛のエサを最適化することにより、生産性を維持しながら、窒素排泄量を低減し、排せつ物由来の温室効果ガスを削減する飼料構成について報告します。</p> <p>(酪農担当 大澤玲)</p>
15:10~	1-⑦	<p>土壌調査から見た県農耕地の現状と傾向</p> <p>埼玉県農耕地土壌の現状(土壌保全調査9巡目結果)</p> <p>農耕地土壌の特性や変化を把握し、適正な肥培管理に活用するため、県内各地の農地に120の定点を設け1979年度から5年で1巡するサイクルで土壌調査を継続しています。2019~2023年度に実施した9巡目の調査結果から、農耕地土壌の理化学性の現状等について報告します。</p> <p>(環境安全担当 岩佐翔)</p>
15:20~		総合質疑

講演発表

分科会2（中教室）：施設野菜・露地野菜・果樹分野

発表時間	課題番号	課題名（発表者）
13:10～	2-①	<p>体系防除でサトイモ上物収量を確保しよう 埼玉県内におけるサトイモ疫病の防除技術</p> <p>2019年に発生して甚大な被害をもたらしたサトイモ疫病は、日平均気温20～25℃、かつ湿度90%以上の気象条件になると発病しやすいことがわかりました。このような生態を基に開発した防除対策について報告します。 (病害虫研究担当 小巻康平)</p>
13:25～	2-②	<p>定植本数を変えずに増収できるトマト栽培技術 トマト増収に向けた栽培管理技術の開発</p> <p>大玉トマトの増収技術として、果房直上の未熟葉を摘葉する未展開摘葉と栽培期間の途中で脇芽を側枝として伸長させる2つの技術とその組合せの効果について紹介します。 (施設園芸先端技術担当 柴田聖菜)</p>
13:40～	2-③	<p>トマト灰色かび病防除のための効果的な薬剤はこれだ 埼玉県内におけるトマト灰色かび病の薬剤感受性</p> <p>県内の施設栽培で発生しているトマト灰色かび病の多くは、ペンチオピラドおよびアゾキシストロピンに対して耐性菌でした。その他の新規薬剤を含めた薬剤感受性を調査したので、その結果について報告します。 (病害虫研究担当 小巻康平)</p>
13:50～	2-④	<p>JV樹形、自動草刈機等の導入でナシの管理を省力化 埼玉果樹における新たな省力化技術の実証</p> <p>ナシ栽培の省力化を目的に、JV樹形と自家和合性品種、機械導入の組み合わせによる、初心者でも取り組みやすい省力化技術を実証しました。導入のメリットや経営規模別の試算モデルも合わせて紹介します。 (果樹担当 鈴木智砂)</p>
14:00～	休憩・パネル発表・試食（40分）	
14:40～	2-⑤	<p>水稲との輪作も可能なタマネギの新作型 タマネギの4～5月収穫作型</p> <p>主穀作経営で野菜の栽培を行ってみたい方、畑だけではなく水田でも野菜を栽培したい方、規模拡大をしたい方に、水稲との輪作も可能なタマネギの新作型を紹介します。 (高収益畑作担当 印南ゆかり)</p>
14:55～	2-⑥	<p>ショウガの収益性が向上する水分管理 中山間地にも適したショウガ栽培</p> <p>品種選びや栽培管理方法により、水の確保が難しい中山間地でも美味しいショウガが作れます。中山間地域や直売を行っている生産者の収益性向上が期待できる内容です。 (高収益畑作担当 後藤一樹)</p>
15:10～	2-⑦	<p>イチゴの花芽分化を地温から考える イチゴ育苗期の培地温度と花芽分化の関係</p> <p>自然条件の気温の下、イチゴ品種「あまりん」の育苗中期・後期で培地温度を変えて管理したときの花芽分化程度を調査しました。育苗後期に培地温度を低くすると、気温に関わらず花芽分化が安定することが示されました。 (野菜育種担当 尾田秀樹)</p>
15:20～	総合質疑	